

《第 525 回(2025 年 6 月 12 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:11 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『雪女 夏の日の夢』 ラフカディオ・ハーン/作, 脇 明子/訳 岩波書店

6月の読書会は、ラフカディオ・ハーンの『雪女 夏の日の夢』を読みました。小泉八雲としても知られるハーンが書く不思議な短編12編と、ハーンが日本についてつづったエッセイ4編が収められています。エッセイのなかにもお話が含まれており、様々な物語と、ハーンから見た日本の風景を感じることができます。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●「耳なし芳一の話」と「雪女」は知っていたが、他の話は初めて読んだ。英語圏の人がよくここまで日本の話を集めたなと思う。それを文章に残すことも大変だったろう。お墓のなかで子どもを産む話が、信じがたく、心に残った。昔話にあるのだろうか。

●ハーンのエッセイは初めて読んだ。外から来た人の感性で書かれていて、新鮮だった。ハーンが日本のことを世界に伝えてくれた。私たちが普通だと思っていたことを改めて考える機会になった。昔からあるものを大切にしたいと思った。

●日本の昔話は読者にゆだねるところがあり、断片で残されている話は怖い。昔から知っている話もハーンが書くことによりエキゾチックな話になる。浦島伝説の死生観の違いは、興味深かった。妻セツさんとの出会いが書かれていなくて残念。

●きちんと読んだのは初めて。エッセイのなかで、ハーンが日本をとて褒めているところが印象的。すべてのものを美しい、日本全部がほしいと書いている。ハーンの目には、日本はどんなふう美しく映っていたのだろう。

●経歴をみて、ハーンに人間味を感じた。自分たちとは違う感覚を持っている人。「お茶のなかの顔」では、魂を飲み込んだと書かれていてドキッとした。日本を美しく書いてくれている。ハーンが書いた絵が添えられているところもよい。

●短い話のほうが怖く感じる。エッセイが印象的。今と違い情報のない時代。日本はハーンにとって暗く感じられたのでは。エッセイの中のクルマヤとの会話がほのぼのしていて、よかった。昔の静かな盆踊りは神秘的に見えたと思う。

●日本人以上に日本人の感性を持っている。「耳なし芳一の話」や「雪女」は私たちの中にすっかり浸透している。そして、ハーンは紙製の小さな窓や箸袋にも感激している。残念ながら、ハーンが危惧したように、ショウジはガラスに変わってしまった。

●ハーンは、日本の伝承を自分の体験に引き寄せて書いている。訳者が書いているように、日本語から英語にしたものをまた日本語に戻すのはとまどう作業だと思う。これを英語で読んだ西洋の人たちはどう感じたのか。記録を残したことに意味がある。

●ハーンが書いた絵や英語で出版された本の表紙が載っていて、楽しく読んだ。行商人の呼び売りの声が面白い。特に、恋占いに対するハーンのお考えが面白かった。日本に対する目線のやさしさや、すべてを受け入れようとする気持ちを感じた。

●怖いというだけでなく、人間味のある話だと思った。松江は静かなところ。そういう場所で語られる不思議な話がハーンにとっては魅力的だったのかも。怖い話が好きな子どもたちに良質な怪談を読んでもらいたい。

●想像力を掻き立てられ、印象的な映像が浮かぶ話が多い。本を読み終えた夜に浮かんだのは怖い「お茶のなかの顔」。エッセイは日本愛にあふれている。ハーンが書き残してくれたから、私たちは古き良き時代の日本を感じることができる。

次回 7月10日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『とびたて!みんなのドラゴン 難病 ALS の先生と日明小合唱部の冒

険』 オザワ部長/著 岩崎書店

※申込み・参加費は不要です。